

金沢医科大学 一般教育機構 人文科学研究室

本田康二郎 准教授



金沢医科大学 一般教育機構
人文科学研究室 本田康二郎 准教授

専門分野

- ・技術哲学
- ・ロボット倫理学

キーワード

- ・人体改造
- ・トランスヒューマニズム

TEL: 076-218-8082

E-mail: kh-honda@kanazawa-med.ac.jp

Website: <https://researchmap.jp/kojiro-honda/>

■身体を改造してもよいのだろうか？

ロボット工学を基礎にした補綴器具の開発は現在注目を集める研究分野です。ハイテク補綴器具が多くの人々の社会復帰を促進する可能性があります。ところが、この技術は欠損した身体機能を補うだけでなく、自然身体を人工身体に置き換えるためにも応用可能です。

現在、英米を中心に起業家や哲学者が集まって「トランスヒューマニズム」という思想運動が勃興しています。この思想運動の核心には「形態的自由 (Morphological Freedom)」という概念があって、これは財産の保持と身体の処分の自由を論じたジョン・ロックの自由概念の延長に出てきたもので、「身体を自由に作り変えたり、作り変えなかつたりする権利」のことを指します。

これまでの美容整形では、姿形を変えるにしても治療の観点からみて問題ないとされてきました。容姿に何らかの問題があり、患者が心理的な傷を負っている場合ならば、容姿を改良することで患者の心の傷が癒やされるというのが理由です。しかし、形態的自由は医療という文脈を超えて、人は自分自身の意志決定で自由に身体を改造してもよいといっています。

ロボット工学は、当初はこのトランスヒューマニズムとは関係ありませんでしたが、ヒューマノイドが人間に近づくにつれて、期せずしてこの思想を裏付ける基礎技術になってきました。ロボット工学の最先端に行く日本も、もしこのトランスヒューマニズムの考え方を受け入れたなら、身体改造先進国になる可能性を秘めています。

SF 小説やマンガやアニメで扱われてきたテーマが、現実的な問題として我々の目前に迫っていると私は考えています。我々は身体改造を受け入れるべきなのでしょうか。もちろん、そこには大きな倫理的問題が控えています。身体を改造するとしたら、その役割を担うのは医師でしょう。しかし、医師が遵守する医療倫理の原則の中に、身体改造を肯定する考え方はありません。医療は病を癒すことを目的としてきました。健康な人間が生身を捨てたいと願ったとして、医師は

その願いを叶えるべきなののでしょうか。このように、トランスヒューマニズムの思想はまず伝統的な医療倫理と衝突するでしょう。

さらに、人体改造がもし安全に行えるようになったとしても、誰もが自由に改造してよいということにはならないのではないのでしょうか。身体改造は我々に新しい能力をもたらす可能性があります。しかし、他方で改造によって我々の世界認識の仕方が根本から変化してしまうことは見過ごせません。

たとえば、ヒトはイヌより彩り豊かな世界を生き、イヌはヒトより豊饒な匂いの世界を生きています。種差は世界認識の差でもあるわけです。今後、テクノロジーとの融合によって新しい種となった「超人」と「普通の人間」との間に世界観のギャップが生まれることが避けられなくなるのではないのでしょうか。そうなったとき、両者は共感の基盤としての「同じ世界」を失うこととなります (Figure 1)。

私はそのことを懸念して、安易な身体改造を控えるべきという立場で、「身体保守主義」(Body-conservatism) という概念を明確化するための研究を行っています。

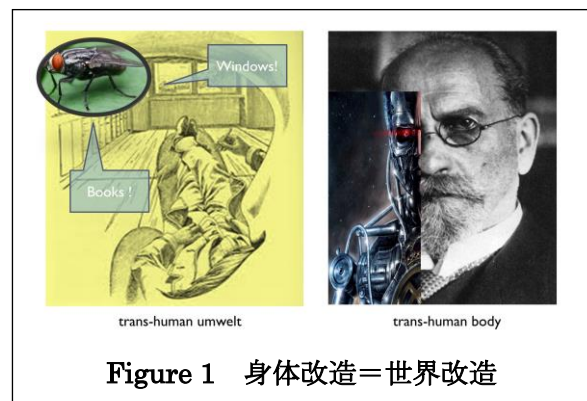


Figure 1 身体改造＝世界改造